

## 「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 『中山間地域の絆を支える女性パワー』

日時 平成30年10月25日（木）10:45～12:00

場所 泰阜村役場 2階「集会室」（泰阜村）

### 目次

1	開会・パネラー紹介	P 2
2	知事あいさつ	P 3
3	活動事例紹介・ディスカッション	
	・松島房子さん	P 5
	・齋藤晴子さん	P 6
	・木下裕子さん	P 8
	(知事感想コメント)	P 10
	・井野春香さん《ジビエ加工販売・毛皮細工製造販売》	P 14
	・小黒あかりさん《地域おこし協力隊》	P 15
	(知事感想コメント)	P 17
4	知事総括コメント	P 25
5	閉会	P 26

【参加者 約130人】

### パネラー

- ・松島房子さん《カンガルークラブ（子育てボランティア団体）代表》
- ・齋藤晴子さん《なでしこの会 会員》
- ・木下裕子さん《障がい児を持つ親》
- ・井野春香さん《ジビエ加工販売・毛皮細工製造販売》
- ・小黒あかりさん《地域おこし協力隊》
- ・長野県知事 阿部守一

### 進行役

- ・山崎鈴代さん（泰阜村役場 村づくり振興係長）

## 1 開会・パネラー紹介

【南信州地域振興局 企画振興課 課長補佐 飯田史晴】

皆様、お待たせしました。ただいまから「県政タウンミーティング」を開催いたします。

私は南信州地域振興局、企画振興課課長補佐の飯田と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

この県政タウンミーティングは、知事が各地へ伺って県民の皆様と意見交換を行うもので、地元の方々の思いを知事が直接、伺わせていただく機会となっております。今回は、「しあわせ信州移動知事室」にあわせて開催をさせていただいております。

さて、県では、しあわせ信州創造プラン 2.0 という、今年度を初年度とする県の総合5か年計画を策定いたしました。この計画は長野県の10年、20年後の将来を展望し、これを実現するための行動計画で、今日お配りしました封筒の中に概要版の冊子と地域版の計画が入っております。移動知事室やタウンミーティング等でいただいた意見を踏まえ、しあわせ信州創造プラン 2.0 を実現しようという趣旨でございます。今後、移動知事室については、回数を増やしてまいります。

本日は地域で活躍されている5名の女性の方をお招きしております。日頃の取組内容をお話いただき、その後、知事や会場の皆様と意見交換等を通じて、中山間地域を盛り上げていくための手がかりやアイデアについて考える場としたいと思っております。

それでは、ここで本日お招きしました方々をご紹介します。本日お配りした資料の中にプロフィールが入っておりますので、そちらをご覧ください。

まず皆様から向かって左側から、木下裕子さんです。木下さんは障がいを持つお子さんがいらっしゃり、そうしたお子さん方が泰阜村の中で安心して暮らせるよう活動をしていらっしゃいます。木下さん、どうぞよろしくお願い申し上げます。

次に松島房子さんです。松島さんは、子どもの成長や子育て中の親の支援を目的としたボランティア活動グループ、『カンガルークラブ』の代表をお務めになっていらっしゃいます。松島さん、どうぞよろしくお願い申し上げます。

次に齋藤晴子さんです。齋藤さんは泰阜村の中で、奥様方が会員となる女性向けコミュニティ『なでしこの会』でご活躍をいただいております。齋藤さん、どうぞよろしくお願い申し上げます。

次に井野春香さんです。井野さんは、有害鳥獣として捕獲された鳥獣の皮を活用する『けも皮プロジェクト』を立ち上げ、ご活躍いただいております。井野さん、どうぞよろしくお願い申し上げます。

次に小黒あかりさんです。小黒さんは泰阜村の地域おこし協力隊員であり、子育て・教育分野でご活躍いただいております。小黒さん、どうぞよろしくお願い申し上げます。

進行役は、泰阜村役場村づくり振興係長の山崎鈴代さんです。山崎さん、どうぞよろしく  
お願いします。

それでは、次第に沿って進めてまいります。初めに阿部知事からごあいさつ申し上げます。

【長野県知事 阿部守一】

皆さん、こんにちは。長野県知事の阿部守一と申します。よろしくお願いいたします。

今日は泰阜村で県政タウンミーティングを開催しましたところ、私の予想をはるかに上回  
る多くの皆さんにご参加いただきまして、大変ありがとうございます。

今日のテーマは「中山間地地域の絆を支える女性パワー」ということで、前の方には、私  
以外は全員女性に並んでいただいています。8月の選挙の際には泰阜村にも来させていただ  
いて、いろいろ地域の皆さんとも、時間が限られていましたけれどもお話をさせていただきました  
が、県内どこに行っても課題は人口減少です。そして若者が少なくなっちゃったと。それ  
ぞれ長野県違うんですけれども、どこに行っても共通して私が言われたのは人が少ない、若  
者が少なくなっちゃった、活力がなくなっちゃったどうしようというこの課題ですね。

それからもう一つは、今日は女性の皆さんに並んでいただいていますけれども、女性も男  
性も、若者も年寄りも、障がいがある人もない人もみんなが本当に活躍できる社会になっ  
ているのだろうか、まだあんまりなっていないんじゃないかと、私は思っています。

長野県、いいところだということで、多くの人たちが移住してくれたりしますけれど  
も、女性の人たちと話をするとまだまだ何か違うよねと。例えば、泰阜村はどうかかわか  
らないんですけれども、自治会の役員の人たちは男性ばかりで、私たちがなかなか言いた  
いことが言えないというふうに、女性の人たちと話をすると、結構、そういうご意見を持っ  
ている人が多いです。

今、人口減少でみんな困っているわけですから、やっぱり男性だとか女性だとかいろいろ  
言わないで、本当に地域にとって活躍できる人たちにはできるだけ活躍してもらって、ある  
いはいろいろな産業分野ではどこでも人手が足りません。産業の振興の課題は人手不足、人材  
不足。そのときにやっぱり年をとっても働ける、活躍できる、あるいは障がいがあってもな  
くても活躍できる、男性も女性も活躍できる、そうした社会を、これは地域だったり、企業  
だったり、我々行政だったり、やっぱり一緒になって考えていかないと、戦後、長野県も含  
めて日本はある意味、経済的には発展してきました。世界に冠たる経済大国になり、一定程  
度、物の豊かさが達成されて、今、格差とか貧困の問題がありますけれども、いい社会には  
一定程度なってきたと思っています。

だけど、これから未来に向けて今までと同じような発想だったり今までと同じような仕組  
みで、これからの人口減少社会だったり、あるいはA I、I o Tの時代の技術革新がどんどん  
急速に進む社会を乗り切っていくことができるとは私は思いません。だけど、実は私は

悲観的に思っているわけではなくて、やっぱり多くの皆さんが前向きに知恵を力を出し合っ  
て、何か線引きしてあっち側、こっち側とかという発想でなくて、全ての地域の人たちが、  
あるいは全ての県民の皆さんが力を合わせれば必ず新しい時代に立ち向かっていくことがで  
きるし、そうした課題を乗り越えて、元気で安心できる長野県になるというふうに思ってい  
ます。

今日は新しい県の総合計画を皆さんにお配りしていますけれども、『学びと自治の力』とい  
うのがこの計画の大きなテーマです。学びと自治、やっぱり私は子どもたちの教育も重要だ  
と思っています。昨日、喬木村の小学校へ行ってICTを使った遠隔教育を見せてもらいま  
したけれども、こういう子どもたちが大人になる頃は、社会は相当変わるだろうなというふ  
うに思って見てきましたけれども、子どもたちの教育も今から未来に向けてしっかり生きて  
いくことができる、生き抜く力を育てられる、そうした教育にしていかなければいけないと  
思いますし、それと同時に私たち大人も、大人になってもやっぱり学び続けることができる、  
そういう県にしていきたいと思っています。

『教育県 信州』と言われていたわけでありますから、ぜひもう一回、皆さんと一緒に学  
びの県をつくっていきたいと思いますし、学ぶだけでは世の中はよくなりません。学んだこ  
とを実践で生かすと。それは地域社会においても、そして長野県政においても、あるいは泰  
阜村政においても同じだと思います。やっぱり学んで、そして力を合わせてどういう社会を  
つくるのかということと一緒に構想して実行していく、それが自治の力だと思っています。  
ぜひ、この『学びと自治の力』で新しい長野県を皆さんとつくっていきたいというふ  
うに思っておりますので、どうかご協力をお願いします。

今日はこの泰阜村における女性の皆さんと一緒に、この人口減少化の地域社会、どう元氣  
にしていくことができるか、あるいは女性の立場からどうすればもっと男性も女性もなく活  
躍できる社会になるのか、そうした問題意識を私自身持ちながら皆さんと一緒にいろいろな  
課題について考えて、そして将来について考えていきたいと思っています。

本日は大勢の皆様方にお集まりいただきましたこと、心から感謝します。ぜひよい会にな  
りますことを心から期待をして、私からの冒頭のあいさつといたします。

よろしく願いいたします。

【南信州地域振興局 企画振興課 課長補佐 飯田史晴】

それでは、以降の進行は山崎さんをお願いしたいと思います。山崎さん、よろしく願  
いします。

## 2 活動事例紹介・ディスカッション

【進行役 山崎鈴代さん】

先ほどご紹介いただきました山崎と申します。

これからは私のほうで進めさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたしますします。

それでは次第に沿いまして、パネラーの皆さんに、日頃の取組について順次お話させていただきたいと思います。

初めにカンガルークラブ代表、松島房子さん、よろしくお願いいたしますします。

【松島房子さん】

ご紹介いただきました、子育て支援のボランティアグループ『カンガルークラブ』の代表の松島房子と申します。よろしくお願いいたしますします。

私たちは、さかのぼること平成7年から現在まで、23年間になりましょうか、活動させてもらっています。今はメンバー12名で、うち3名は産休中とか子育て中でちょっと忙しいので休会しておりますけれども、そんな仲間と活動しています。今日は会場にも大勢仲間に来てもらっています。隣で託児を担当してくれている仲間もおります。

こういう皆さんと一緒に活動しているわけなんですけれども、大きく分けて私たちは2つの柱を持って活動させてもらっています。

1つには、子どもたちに肉声で物語を伝える活動として絵本の読み聞かせというものを大事に考えていて、保育園、小学校、中学校へ毎月、伺わせてもらっています。

それから泰阜村に伝わる民話の再話活動、難しい言葉で書いてある民話を子どもたちにわかりやすい言葉に直して伝えていくという活動をしています。それから、あとブックスタートの手伝いなど、またそれにかかわる学習活動も毎月しています。

最近では、子どもたちだけじゃなくて、お年寄りも絵本や紙芝居や話を聞かせてとってくださるので、お年寄りのサークルとか、お元気さんですか、そちらにも出かけさせていただいております。

2つ目といたしまして、子どもの育ちと親を支える活動としまして、長期休みのときの学童保育を立ち上げた経過がありますので、そのお手伝いをしております。

それから今年から始めたんですが、学校の臨時休みというのが年に2～3回ありまして、その時に子どもを見てもらえるところがないという声を親御さんから聞きましたので、その1日、学童保育の担当をさせていただきました。

また、イベントや集会のときの託児、先ほども言いましたが、本日も隣の部屋で託児を受け持っているメンバーもおりますが、そんなことをさせてもらったりしています。

それから学校の授業の手伝いとして絵本や民話にかかわること、あと家庭課の授業の手伝いなどをしております。

そういった活動の中で、私なんかは本当にいろいろなことに手を出したり皆さんに連絡を取るぐらいで大したことはしていないんですけれども、メンバーの皆さんや村の人の協力体制が本当にすごくて、今まで、毎年少しずつ新しいことを加えてやっているんですけれども、計画したけれどもできなかったということが一回もなく、皆さん忙しいのに、ボランティアなのに合間の時間をつくって出かけてきてくださいます。こんなことができるかなと思っても「できるかできないかはやってみにゃわからん」といって力を貸してくれるという、そういうことはすごいなと思います。

それって、メンバーだけじゃなくて村の皆さんも、ちょっと手が足りないので託児を手伝ってもらえませんかとか、家庭科の授業のミシンがなくてちょっと手伝ってとかと言うと、二つ返事で引き受けてくれて手を貸してくれるという、そういうところがすごいな、本当にすごいな、ありがたいなと思って、そういう方たちと一緒に活動させてもらっていることを大変誇りに思います。

そんな活動の中で気になったり、考えさせられることが一つありまして、それは最近、メディア機器というのがすごく発達している状況がありまして、テレビだとかビデオだとか、スマホ、ゲーム機だとか、そういうものが子どもたちの生活の中で使われる頻度が非常に多くなってきて、それにかかわる弊害みたいなものもあちこちで報告されるようになっていきます。

私たちは、人間が本来持っている人としての育ちというものを望んで、子どもの前で肉声で語りかけるお話、物語を伝えて、人と共有して楽しむということを大事に考えてやってまいりました。もちろん基本は家庭ですけれども、個人の力では難しいところもあると思いますので、県として、もし、メディア機器との接し方など、何か対策とか、参考になる事例などがありましたら教えていただければありがたいと思います。

以上で終わります。ありがとうございます。

【進行役 山崎鈴代さん】

ありがとうございました。

それでは続きまして、なでしこの会、齋藤晴子さん、よろしくお願いいたします。

【齋藤晴子さん】

今、ご紹介いただきました齋藤晴子といたします。

私は女性がつながる場『なでしこの会』という会の実行委員としていろいろと活動しております。

そもそもこういった会かと言いますと、男性は40才以下の方は消防団に所属をして、そういったところをつながりを作れる。ただ女性は、多分おそらく何十年か前は若妻の会みたいな、奥さん同士が集まってつながる場というのが村でもあったようなんですけれども、もう無くなって久しくなって、やはり女性の方々がつながる場がないということで、ぜひそういったつながる場をほしいという村の女性の声を受けて、去年の2月ですか、村の教育委員会が主催となって、女性が集まる場をつくっていただいたのがそもそもの始まりです。

女性がつながる会ということであれば、やはり村の女性が中心になってこういったものはやっていったほうがいいたろうということで、そういったことに興味のある女性が、今、6名ですか、集まって実行委員となって企画をするということをしています。

初めは『若妻の会』という名前で一たん召集があったんですが、女性陣から、「いや、若妻の会という名称はやめよう」ということで、なでしこジャパンにちなんで『なでしこの会』という名前にしました。

本当に始まったばかりの会なので、これまで実際、何をしてきたかと言いますと、今年の2月に村の、それこそお母様方に講師としてきていただいて、泰阜ならではの伝統料理と一緒に食べて食べようという企画を行ったのと、今年の6月に近くのアイパーク、村の公園で、泰阜らしく、みんなで焼き肉を食べて交流しようということで行いました。

実際やってみて実感したのは、やはり女性陣はみんなこういうつながりを求めているんだということがすごくわかりました。知っている者同士もいましたけれども、知らない人でもやっぱりつながれてすごくよかったと、これ年に1回しかやらないの、もっとやって、2回やろうよ、みたいな声がたくさん出てきたので、早速ですが忘年会か新年会を今、企画しているところであります。

やはりIターンですとか、お嫁さんとして入ってきた方は特になかなかつながる場がないという声だったり、あと小さいお子さんがいると、どうしても外に出られなくてこもりがちになるということで、こういった場があるのが本当にありがたかったという声を聞いています。

あとは、この会は一応、45歳以下の既婚の女性に対して案内を出しているというような感じになっていまして、違う世代の方とつながれるということもありがたいと声もありました。

なので、今、本来であれば既婚とか未婚ですとか、本当に年齢も問わず集まりたいなというところではあるんですけれども、泰阜の女性全員というふうに集めると、ものすごく膨大な数になるということもあったので、まずは、そうやって区切るということと、やはり中心になって集まってもらいたいという層の皆さんが来やすい企画にしていこうということで、一たん、区切っている現状ではあります。ただ、会としては別に既婚・未婚問わず、年齢問わず、こういった会に出てつながりたいという人がいれば、来ていいですよというふうにはしていまして、できる限りいろいろな方がつながる場になったらいいなと思っています。

なので、大きな目的としては、村の女性同士がつながって、いずれは女性・男性、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、そして子どもたちみんなと一緒にこの村の暮らしを楽しんで、健やかに輝いていける地域にできたらなということをおもっています。

あくまでこの会はきっかけづくりかなというふうに思っています、本当に大それたことをしているわけではなく、ただ大事なことは、一応区切っていますけれども、ある程度、広い範囲に声かけられるということが重要かなと。この会で小さな輪をいっぱいつくってもらって、そこからそれぞれが輪を広げていってもらえば一番いいのかなというふうに思っています。

私からは以上です。ありがとうございました。

【進行役 山崎鈴代さん】

齋藤さん、ありがとうございました。45歳以下の既婚の方が入れる会、私もまだ大丈夫、みたいな・・・それでは続けます。続きまして障がい児を持つ親の立場から、木下裕子さん、よろしくお願ひいたします。

【木下裕子さん】

木下裕子です、よろしくお願ひします。

私には小学5年になるダウン症の息子がいます。生まれてから夫の実家の泰阜村で生活していましたが、飯田市にある療育センターに通い出したことや体がとても弱かったことから、3歳から小学3年の夏まで療育センターや病院に近い飯田市へ出て生活していて、時々泰阜村に帰ってきているという状況でした。ですが、体力がついた小学3年のときに泰阜村へ戻り、村での生活を再スタートしています。そんな中で感じていたのは、村の中には同じ障がいを持つ人やその親はもちろん、障がい者と呼ばれる人たちを見ることが全然なく、どうしているんだろうということでした。

村の企画の未就園児の集まりなどへ出かけても同じ悩みを話せる人がいなくて、村の中で息子のことを相談できる人はいませんでした。その点、飯田市は施設や事業所もたくさんあり、多くの仲間と知り合えて、障がい児を持つ親にとってとても暮らしやすい場所だと感じました。ですが、いつか村へ戻って暮らしたいと思っていたので、いつも仮住まいという思いがあり、早めに泰阜村の中で息子の居場所をしっかりとつくりたいという思いがありました。

小学校は養護学校へ通うことになり、兄弟もいないことから泰阜小学校とのかかわりはなくなっていました。息子には地域に同年代の友だちをつくってあげたかったし、村の子どもたちにとって、遠くの学校へ行っているよく知らない特別な子と思われるのが嫌だったので、年に数回、居住地校交流を行い、とにかく村の中で息子のことを知ってもらい



たいと思い、村や地域の祭りなど、イベントにはできるだけ参加してきました。ですが、地域の学校へ行っていないのでママ友と呼べる人はいなかったし、自分も出身は違うし、友だちはなくて、イベントへ行っても結局、家族だけで過ごすことが多く、地域の人たちと交流とまではいきませんでした。息子を見てもらって知ってはもらえたけれども、私は村の中では孤独だなと思うこともありました。息子の居場所どころか、私自身の居場所さえないようにも思えました。

そんなときに、協力隊の人が村を楽しむイベントに誘ってくれました。息子にぜひ来てと言ってくれて本当にうれしかったです。私が頑張らなくても息子のことを知ろうとしてくれて、特別扱いではなく、どんどん輪の中に入れてくれました。その参加から知り合いが増えていき、息子を連れて村の企画に参加することが楽しみになりました。言ってもわかってもらえないだろうと思っていた悩みも相談でき、スタッフの方々が親身になって考えてくれました。そしていろいろなつながりが生まれていきました。息子は泰阜村での居場所ができて、きっと幸せになれると希望も持てました。

泰阜村でも2年くらい前から障がい者福祉について考える会が時々開かれ、意見交換をしたり、障がい者施設を見学に行くといった活動が何回か行われ、村の障がい者のことを考える機会が増えました。そして村の取組と保育所や学校の協力により環境が整い、村に住むダウン症の子どもが村の保育所へ入所し、昨年、泰阜村小学校へ入学しました。このことも、私にとって大きな励みになりました。

泰阜村のような小さな田舎の村では障がい児や障がい者を隠すように生活したり、村外の施設へ行くしかないということをよく聞きます。確かに飯田市は障がい児や障がい者の事業もたくさんあるし行政の取組もいろいろあり、同じ障がいを持つ親とのつながりがしっかり持てると思います。泰阜村にはそういう強みはなくて、行き場所がないと思ってしまいます。でも、近所のおじいさんやおばあさんが困っていたら、私たちが何とかするしかないだろうという気持ちが生まれやすいと思います。

年齢とか障がいがあるとかないとか関係なく、そこにいる人たちで助け合って協力し合えるという良さがあると思います。実際、息子はそういう環境の中で、いろいろな人と触れ合うことで人にやさしくするということが前よりできるようになりました。泰阜村は小さな村だからこそ、人と人とのつながりが深く、支え合えるのではないかと思えるようになりました。

泰阜の村の人たちの中で息子には育ててほしいと思います。そして、今も、私がしたのと同じ思いをしている人たちが村の中にいると思います。子どもの発達について療育センターとかに行けば相談できるけれども、村の中では誰にも相談できず孤独を感じてしまっているお母さん、障がいを持っていて地域の人たちと交流がなく孤立してしまっている人やその家族、そういう困っている人たちが一人で悩まず、気楽に来て悩みを話せる場所があ

ればいいと思います。子育てしているお母さんや高齢者、障がいがあってもなくても誰でも来て誰かと話せる場所、そういう場所が泰阜村の中にあれば、そこがもっと人と人をつないでいくと思います。そういう場所をつくっていきたいと思います。

そしてその場所が、孤立してしまっていた人が社会とつながれるきっかけとなっていけたらいいなと思います。以上です。

【進行役 山崎鈴代さん】

木下さん、ありがとうございました。一生懸命、発表をありがとうございました。

ただいま3名の方の活動報告、また思いを語っていただきましたが、ここまでのところで知事からご感想やご質問などをいただけますでしょうか。

また、先ほどカンガルークラブの松島さんから、近年、子どもたちを取り巻くメディア環境、子どもの成長、生活環境に悪影響を及ぼしているのではないかと危機感を感じておられるということですが、県として何か参考になる事例がございましたら併せてお願いいたします。

【長野県知事 阿部守一】

3人の方から、活動とか今の悩みを教えてくださいましてありがとうございました。

松島さんのメディアの弊害のお話し、今の子どもはみんなテレビゲームに夢中になっていて、ちょっと大丈夫かというふうに思うことが私も結構ありますけれども、どうなんですか。これって、これは多分、本当は女性の皆さんのほうがそこら辺は感度が豊かだと思うんですけども。

私は、ちょっと皆さんに異論、反論をちょっと聞かせてもらいたいんだけど、私はこれをやっちゃいけないとか、これはだめだと、あまり言わないほうが実はいいんじゃないかなと思っていて、むしろもっと楽しいこと、もっと夢中になれること、それを見つけてあげることのほうが、そういうものから隔離するよりは大事な気がしています。

長野県、今、自然保育、『信州やまほいく』と言っていますけれども、自然の中で伸び伸び育つようにしていこうという取組をやって、この間も東京で、鳥取県と広島県、平井知事と湯崎知事と私の3人で発起人になって『森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク』というのをつくったんです。今、自然保育、自然学習、すごく見直されています。国全体も小学校以前のところへの教育を重視するようになっていきます。

今までは幼児期は、学びの時期としては比較的意識が低かったと思いますけれども、これからは幼稚園だったり保育園も、やっぱり教育という観点をしっかり持ちましようねということになってきます。

私、知事ですから、東京では逆立ちしてもできないようなことを長野県で実現するのが私

の役割の一つだと思っています。東京ではこんな泰阜村みたいな美しい自然とか景観はないです。逆立ちしても、森の中で子どもを育てようなんていうことは絶対できません。

ぜひそういう環境をもっともっと生かして子どもたちの教育をしっかりやっていく必要だ  
ってあると思いますし、皆さんほとんどがそうだと思いますけれども、皆さんが子どものこ  
ろはテレビゲームなんか無かったですよね。無かったから木の枝とか木の葉っぱとか、何で  
もおもちゃになっていたわけですよ、何でもおもちゃに。今は何か与えられたものを与えら  
れたとおりの仕方です遊んでいるので、私はかわいそうだなと。枝だってちゃんばらの刀にな  
ったり、秘密基地の柱になったり、いろいろな使い方があるわけですよ。

何かそういうことをわからない子どもが増えてきているので、それこそやっぱり、これは  
シニア世代がいいんじゃないかと思っていて、昨日、松川町で『いちごサロン』という、シニ  
アの人たちが、先ほどもちょっと木下さんから居場所の話がありましたけれども、月に1  
回15日にみんなで集まって、シニアの皆さんが運営しています。そこにお子さん連れの方も  
いらっしゃったり、お年寄りの方もいらっしゃったりして交流するサロン、まだ今年始めた  
ばかりなんですけれども、そういうことを地域の皆さんが自主的にやって、お互いのつなが  
りをしっかりしていきましょうねということをやっています。

だから、その場でもちょっと話をしたんですけれども、そこも学びの場にしてはどうでし  
ょうかねと。昔、私は「あやとり」を男だけどやりましたけれども、今の子どもにあまりそう  
いうことを教えてくれる人がいないので、もっとそういうことを教えてもらいたいと思っ  
たのと。

もちろん行政としてはインターネットの弊害とかネットリテラシーの教育とかいろいろな、  
こういうことは有害だよとか、そういう教育は行政としてはもちろんやっていかなければい  
けないんですけれども、それ以上にやっぱり私は子どもたちの関心が、せっかく泰阜村にい  
る子どもだったらそっちに行かないように、もっとほかの楽しさというのを、地域の皆さん  
と一緒につくっていくことが前向きな解決策じゃないのかなという感じをしています。ちょ  
っとこれはまた皆さんの異論、反論を聞かせてもらいたいと思います。

それから齋藤さんは何か問題は何かありますか、あまり問題はないですね。あまり問題は  
ないからちょっと、では齋藤さんには、みんなの問題を応援してもらおう立場になってもらっ  
て。

実は木下さんのお話の中には、今日のテーマである中山間地域をどうしていくかというこ  
とを考えると、重要な話が実はいっぱい入っていると思っています。

もちろん、障がいがあるお子さんをどうみんなで支えていくかということは、これ我々行  
政もしっかりやらなければいけないテーマでありますし、その居場所を、つながる場所をつ  
くりたいというふうに木下さんはおっしゃっていたので、ぜひ、今日せっかくこういう場で  
参加した皆さんでつくってもらえるといいんじゃないかと思っています。

中山間地を考えるとときに課題だというふうに私が申し上げたのは、どこでも人口が減っています。例えば障がいがある子どもたち、あるいは障がいがある人たちを応援していったり、あるいは、これは障がいの問題だけじゃなくて、例えば病気の人たちを医療で支えたりしなければいけない、それってどうあるべきかというのは、ちょっと皆さんと一緒に考えたいんですよ。何かというと、例えば、私は今回の選挙の公約の中で、医療機関について、役割分担の明確化と連携を図りますということを書いています。何を意味しているかということ、人口減少の中で、私も含めて皆さんも医療のお世話になると思いますがけれども、医療資源というのは限られているんですよ、限られているんですよ。

お医者さんの数も、今、長野県では増えてはいるんですけども、でも、まだまだ偏在していますし、あるいは、診療科目によっては、例えば、今日は女性が多いのもっと身近なところで出産できる環境をつくってほしいと、それには産婦人科のお医者さんをもっともっと増やさなければいけないと、そういう課題があります。

そういうことを考えたときに一番理想は、例えば77の市町村がありますけれども、77の市町村どこでも出産できると、そういう環境をつくりますと、私が公約にしたら、それはもしかしたらみんなハッピーかもしれないですよ。でも片方で、その実現可能性を考えたときに、ほとんど無理だと思います。そうすると、理想的な形と実現可能な姿と乖離しているわけですよ。これは多分、障がいがある子どもたち、あるいは障がい者をどう支えるかというのも同じ話で、理想的な形とその現実の話とは結構乖離しています。もちろんそれを縮める努力というのはしなければいけないんですけども、どういう形が本当に実現可能で、かつ望ましいのかというのは、しっかり考えなければいけないテーマだと思います。

多くの人たちにとっての理想の形は、これさっき言った病院の役割分担の明確化と連携とあったときに、どこの病院でも、例えば高度ながん治療ができるようにするべきかどうかとあったときには、もちろんしたほうがいいですよ、もちろんそのほうが望ましいんですけども、なかなかそこまでお医者さんを確保できない。あるいはお医者さんとか医療体制を分散すればするだけ、長野県全体のハイレベルな医療は逆に弱くなります。

今、長野県でも、例えば救命救急センターが県内に幾つかありますけれども、いろいろな議論がありますけれども、救命救急センターをもっともっと増やしたほうがいいという議論ももちろんあります。増やせば増やすほど救命救急の専門医を分散させなければいけないので、そうすると1カ所1カ所のレベルが下がってしまうのではないかと議論になります。これというのは、どっちが正しいとか、どっちが間違っているのではないと思っていて、これは正に自分たちで考えて選択していかなければいけない話だと。その議論は、私は知事ですから先導してしなきゃいけないと思いますし、そういうことはやっぱり地域の皆さんと一緒に考えていくことが必要だと思います。

それからもう一つは、縦割りで考えてはいけないと思っています。医療の話ももちろん身

近な医療機関になんでも揃ってあればいいんですけども、それは無理ですよ。泰阜村に高度な救命救急センターをつくりますというのは、実現の可能性は低いと思います。

でもそういう医療機関にできるだけ早くアクセスできるように、例えば道路を整備して救急車で運ぶ時間短縮するとか、今、長野県、ドクターヘリ2機ありますけれども、それをもっとちゃんと有効に活用できるようにしていくとか、医療の話だけを医療の話だけで考えると、多分、最善な解は出てこないですよ。医療の話だけれども実は道路の問題だったり、あるいはドクターヘリをはじめとする、病院をつくる、つくらないという以外の観点での検討というのをやっていかなければいけないんだろうと思います。

そういう意味で、木下さんがおっしゃっていただいた話というのはすごくいろいろな論点があって、障がい者福祉の仕事というのは、今、市町村行政になっているんですよ、ほとんどが市町村行政になっていて、でも、一般的に障がいの種別というのは、いろいろな障がいの方がいらっしゃいます。いろいろな障がいの方に対して専門的なサポートをする人材がすごく豊富にいれば、どこでも身近なところでサポートできるような形をつくるということが望ましいんですけども、なかなかそれは、今、どこの分野でも人手が足りないという状況になっているので、そういうことを考えたときには、ある程度集約していくということも必要だと思います。

集約しながらもそこへのアクセスをどうするか、あるいは、これ先ほどもちょっと控室でお話していたんですけども、今、長野県は特別支援の学級はどんどん増えています。ですから、なるべく身近なところで障がいのある子どもたちが学べるような環境をつくる方向にはしてきています。それは県としてもしっかりとやりますし、やっぱり地域の市町村の皆さんにも協力をいただいて、あるいは地元の住民の皆さんにも一緒に応援してもらって、障がいがある子どもたちと一緒にサポートしてもらおう。それには、学校だけよければいいという話じゃなくて、まさに木下さんおっしゃっていただいたように、やっぱり地域の中で温かく受け入れていく、そういう環境をつくっていかねばいけないので、それは我々行政もしっかり考えますし、ぜひ皆さんも、今日は木下さんは本当に勇気を持っていろいろな発言していただいていると思うので、ぜひ一緒になって皆さんと考えられればありがたいなというふうに思います。

ちょっと私の問題意識で、発表いただいたことと若干、視点が違うかもしれませんが、私の立場からするとやっぱりそういう観点を持って、ぜひ今日集まっていた皆さんと一緒に考えていくべきテーマだなというふうに思いますので、ちょっとお話ししたいと思います。また皆さんと意見交換させてもらいたいと思います。ありがとうございます。

【進行役 山崎鈴代さん】

ありがとうございました。

それでは、あとお二方いらっしゃいますね。お二人から日頃の取組について発表をお願いしたいと思います。

それでは、けも皮プロジェクト代表の井野春香さん、お願いいたします。

#### 【井野春香さん】

よろしくお願いします。私は、皆さん御存じの方も多いかと思いますが、こちらの村に来て、今、9年目なんですけれども、来てからグリーンウッドで働いたのを経て地域おこし協力隊になって、『けも皮プロジェクト』というシカの皮を有効活用しようという取組をやっております。

けも皮プロジェクトは、そもそも私がシカが大好きだという思いから始めたものなんですけれども、たまたま村の猟友会の皆さんとのつながりができて、その皆さんが温かかったということもあたりとか、立ち上げた当初は、この近隣にはお肉の施設がかなり多くあったので、お肉じゃなくて別の何かということを思ったときに、誰も使っていなかった皮というところで、素人だったんですけれども、そこから始めたという経緯があります。

皆さんのおかげで、この9年ずっと村にいてやることができたというのはすごく大きくて、多分、これが村の猟友会の皆さんとか、あるいは地域の皆さんとの交流がなければ、私はこんなに長くいなかったなというのをすごく思っています。

『けも皮プロジェクト』は、けもの皮と、けものかわいいと、けもの皮がいいという、そんな意味も込めてつけた言葉なんですけど、けもの皮を扱ってきていまして、現在は個人事業主として立ち上げてやっております。本当は会社とかという形にして立ち上げたいなと思ったんですけれども、なかなか、まだまだきちんと事業として皆さんを養っていくというのがつくりだせていないので、今のところは個人で頑張っているというところです。

去年から村の猟友会と、あと村の皆さんの尽力のおかげで村にジビエの加工施設というのをつくることができました。最初は南信州には、結構お肉屋さんがあるから、と思ってはいたんですけれども、活動をしていくうちに、猟友会と猟とかをやっていたりする中で、泰阜村からお肉を販売するような場所までお肉を持っていくということがないんだということがわかりまして、現実的にはやっぱり、食肉として販売の流通にのせるにはやはり近くに施設がないと難しいということで、去年、村と、あと県と国とに協力していただいて、県で30件目のジビエの加工施設をつくるに至りました。そこで運営会議を猟友会に委託していただいていますので、私がやらせていただいているという現状です。ただ、まだ何分、いろいろと足りないところも多く、いろいろなお金をいただきますので、もうちょっと頑張っていきたいなと思っているところです。

お肉に関して、ジビエの施設を運営していく中で思うことは、結構、いろいろな方たちに買っていただいているんですけれども、どうしてもやっぱり都会の方への販売が多くて、

地元の衆ももちろんお買いいただいているんですが、やっぱりイノシシが多いなというのは思います。ただ残念ながら、うちの施設、イノシシがほとんど夏にしか入らないので、ちょっと残念だなとは思いつつ、皆さんの要望に応えるのは難しいんですが、シカ肉に関してはやっぱり硬いだとか、パサパサしているとか、今までの経験なのか、情報からなのかわかりませんが、そういうのもありつつ、なかなか一般的には使いづらいのかなという印象を受けております。

食べていただいた方はみんなおいしいと、くせがなくてさっぱりしていると言ってくさるんですが、そういったところをやっぱりもうちょっと広げていかなければいけないなと思ったりとか、あとは、内臓系に関して、やっぱり今、国もジビエのお肉とかを食肉を流通させる上で安心・安全という部分にやはり重きが置かれているように思いまして、内臓に関して県のジビエのガイドラインでは特にはっきりとした明記はないんですが、やはりその辺もゆくゆくは必要になってくるのかなということも思っていて、もし国の流れとして、安心・安全の面で内臓についても処理が必要なり、あるいは牛とかのようにだめというふうになるのはちょっともったいないなと思っていますので、ぜひその辺を県とかにも検討していただけたらなと、ちょっと考えているところです。

今、そんな形ででも皮プロジェクトと、ジビエの加工施設の運営に関わりながら何とかこうきちんと運営が回っていくように、新しい人たちを入れられるように頑張りたいなと思っていますので、これからもよろしくお願いします。

【進行役 山崎鈴代さん】

井野さん、ありがとうございました。

それでは最後に地域おこし協力隊、小黒あかりさん、お願いいたします。

【小黒あかりさん】

よろしくお願いします。こんにちは、地域おこし協力隊の小黒あかりです。私は教育、子育て分野で活動をしています。

私はこの泰阜村に来て3年目になるんですが、その前は長野市にある私立の小学校で教員をしていました。その学校はできた当初に入って、子どもたちにとってどういうことが大切かなというのを考えながらずっと学校づくりをしてきました。そんな私が地域おこし協力隊になろうと思ったのは、小学校で働いているうちに地域コミュニティの大切さをとても強く感じるようになったからです。

今、子どもたち、泰阜村はそうでもないかもしれないけれども、特に都会の子たちというのは家か学校がもうそれだけが世界になっていて、昔って多分、地域があって、地域の中のいろいろなつながりがあつての学校だったから、本当にいろいろなつながりがあつたと思う

んですけれども、何かそこがなくなっている気がして、それで地域のことをしたいなと思って地域おこし協力隊になりました。

泰阜村で暮らし始めた1年目は、泰阜村の持つ教育力にすごいなというのを感じっぱなしでした。ちょっと具体的に挙げ始めるとすごく時間がかかってしまうので、一番感じたところなんですけれども、「子どもはみんな村の子」というふうな感覚が村の方々にはあって、さまざまな年代の方とあったかいつながりがある中で、安心して過ごせるということが一番大きいかなと思っています。

2年目からは、良くも悪くも慣れてきて、これが普通という感覚になってきています。それで、いろいろな課題も今、直面しているところなんですけど、これらの課題も、みんなと力を合わせて行けば何とでもできそうな気がしています。

なぜそう感じられるかという、泰阜村は人口約1,650人、保育所、小学校、中学校も村に一つで、1学年が10人程度、子どもたちも学校も教育委員会も保護者も地域も日常的に顔を合わせていてお互いに見知った関係なので、本当にそれがとてもいい環境だなというのを、今、人口が減ってきているとかと言っている中、本当に子どもたちだったり、人にとって何かちょうどいい環境だなというのを私は感じています。それは何かあったときに相談したり、新しいことを始めたりというハードルが都会と比べて低くて、臨機応変にできやすいという環境であることです。そして、その土台にあるのが、今まで泰阜村の方々が大切にされて守ってこられたコミュニティの力なんだろうなというのを思っています。本当にすごいなともう日々感心していて、さまざまな可能性を感じているところです。

私の活動なんですけれども、一言で言うのは難しく、泰阜村の子どもたちがいるところにいろいろお邪魔して活動していますので、本当にいろいろ多岐にわたっています。どこの活動でも、私の中の思いとしては、子どもたちがこの泰阜村の中で子ども時代を思いっきり楽しんで、それを取り巻く大人たちも、その子どもたちとの生活を楽しむというところを目指していけたらなというのを思いながら活動しています。

具体的な活動としては、小学校・中学校へ行って子どもたちのサポートをしたり、あとは学童保育のスタッフをしたり、子育て広場を手伝ったりというような、既にある活動の中にスタッフの一人として関わらせていただいて、一緒に考える中でよりよいものにしていくということです。それをしているうちに、こんなものがもっとあったらいいなと思うことが少しずつ出てきて、実際に幾つか始めましたのでそれも紹介したいと思います。

1つ目はプレイパークです。プレイパークは先ほど阿部知事のお話の中にもあった、もっと楽しいことをというところにすごくつながるなと思うんですけれども、自然がたくさんあるけれどもなかなか遊ぶ機会、子どもたちも大人も遊ぶ機会が少なくなっているかなと思うんですけれども、みんなで集まって自然の中で楽しもうよという思いでやっています。

プレイパークというのは自分の責任で自由に遊ぶということをモットーにした遊び場です。



昔、棚田だった場所で、今、森になったようなところをお借りしてロープを張ってアスレチックのようにわたりたり、たき火でウィンナーを焼いたり、泥遊びをしたりして遊んでいます。

2つ目は通学合宿という活動です。通学合宿とは学校のある日に子どもたちが公民館などに泊まって、そこで食事だったり洗濯だったり、そういうようなことを子どもたちや地域の人たちとも協力しながら一緒にやって泊まる、それでそこから学校に通うというような活動です。

いろいろなところで、この通学合宿が行われているんですけども、泰阜村の通学合宿でこだわっているところは、子どもたちのやりたいという思いからスタートして、その声を応援しながらゼロから一緒に作り上げていくというところなんです。なぜ、そこを大切にしているかという、自分の思いを実現させていくという経験というのはこれから先、自分の人生を楽しく生きていくという力にきつとつながっていくだろうなということを思って、そこを大切にやっています。

3つ目は、フィリピンカオハガン島研修視察です。フィリピンにカオハガン島という島があるんですけども、その島は一言でいうと何もなくて豊かな島という言葉であらわされるかなと思うんですけども、その島へ行ってその良さや課題を感じて、それを通じて泰阜村のこれからを考えるという研修です。今の泰阜村は、年の大きい方や今まで積み上げてきたもので持っているようだと思っていて、この研修ではこれからの泰阜村を担って行く人たちが泰阜村のこれからを考え、何かできるといいなと思っています。

4つ目は、今、話したようなことを教育子育てパンフレットにして、村の人たちが今、私が感じてきたようなことを大切にしながらこれからもいい村が続いていくといいなという思いを込めて、パンフレットづくりも進めているところです。

このような活動をしています。ありがとうございました。

【進行役 山崎鈴代さん】

小黒さん、ありがとうございました。

知事すみません、ここでもまた、お二方にご感想をいただいてよろしいですか。

【長野県知事 阿部守一】

井野さんの具体的なジビエの話は、県でつくっているジビエ衛生マニュアルとか、ジビエ衛生管理ガイドラインをそろそろ見直さなければいけないので、内臓の話はその中でしっかり考えていくようにします。

ちょっと、私にもまたメールでもいいですからどうやって、どういう活用をすればいいのかというのをまた教えてもらえればと思いますので、よろしくをお願いします。

さっきの都会への販売が多たって、シカを泰阜村の人たちはあまり食べないの。

【井野春香さん】

シシ（イノシシ）のほうが人気だと思います。

【長野県知事 阿部守一】

シカは食べないということ。

【井野春香さん】

一部の方ですかね。

【長野県知事 阿部守一】

今日大勢いらっしゃいますけれども、あまりシカ肉を食べないんですか。

【参加者】

あまり食べない。

【長野県知事 阿部守一】

食べない、どうしてなんですか。長野県は今、信州ジビエを売り出しているんですけども、地元でも少し食べていただかないとやっていられないなと思いますけれども、何で食べないの。

【参加者】

イノシシのほうがおいしい。

【長野県知事 阿部守一】

でも、シカは料理の仕方とかですごくおいしいですよ。

【井野春香さん】

そう思うんですけども、やはりイノシシのほうが人気が高いですね。あと皆さん多分、昔、食べ過ぎてという方も多分おられるのか。

【長野県知事 阿部守一】

東京のレストランへ持っていったら高級食材ですよ、シカ肉。

身近なところでぜひもっと消費していただけるような仕組みを、ちょっと地域振興局も考えて。よろしくお願いします。

あまり食べないの、本当に食べないの。

【参加者】

私も捕っているほうなんですけれども、シカ刺しが当たるから、今、生食しなくなったんですけれども、あれを指導でこういうふうにすれば食べられるよというのがあれば、私も大好きなんですけどね。

【長野県知事 阿部守一】

家畜じゃないので、家畜と同じような扱いは衛生上しづらいと思いますね。

できるだけ皆さん、ジビエを食べてくださいね。

それから、小黒さんの話の中で、これちょっと今日の中山間地域を考える上で、1学年10人程度、ちょうどいい規模だねという話がありましたけれども。これ地域社会、今、人口減少したり、1クラスの数も減ってきてしまっているんですけれども、これ減ってしまって大変だという見方と、これぐらいでいいんじゃないのという見方と両方あると思うんですね。

今、長野県も日本全体の人口も減っている状況ですが、泰阜村の皆さんは、今ぐらいの人口減少はしょうがないよねと、これぐらいがほどほどの社会でいいんじゃないのというふうに感じている人と、こんなに人が減ってしまったら、とてもじゃないけれどもやってられないという人と、どれぐらいの割合があるんですか。これぐらいでほどほど感があっていいんじゃないのと思っている人はどのぐらいいるんですか。では、これではやってられないよという人は。では、前にいる「やってられない派」の人はどういうところがやってられないの。

【齋藤晴子さん】

私、今、子どもが3人いまして、小4と年長と3歳がいるんですけれども、私ももともと東京のほうの出身で何十人という教室でいたので、少人数はすごくいいなとは思ってはおります。ただ、やはり今、10人が本当にぎりぎりなんですよね。なので、正直なところ、10数人から20人ぐらいがちょうどいいなとは思ってはいるんです。ただ4年生のクラスは10数人いるんですけれども、2番目の年長さん、次の1年生なんですけど、3人なんです。その2つ上の学年も4人ということがあって、やっぱり自分が子育てする中で、4人の学年、3人の学年って出てきて、このまま減っていくんじゃないかという危機感はやっぱりすごくあって、そのちょうどいいを保つためにはやっぱり何がしかがないと。ここで子育てしていいよねとみんなが思って人が来るようなことをしない限りは。今は、どちらかというところ

ーンの方が多いので、そのおかげで本当に人数がいらっしゃるので、それはいいなと思う一方で、やっぱりそれを維持、もしくはやっぱりもうちょっとというふうに思ったら、今のままでとっていたら多分、それはもう衰退になってしまうかなという危機感を感じています。

【長野県知事 阿部守一】

将来を見通すと、ちょっと今のままではトレンドとしてまずいよねということですよ。

今日は横前村長もいらっしゃっているのでちょっと何か一言。今の、人口減少は村としてはどんな感覚でいらっしゃるんですか。

【泰阜村長 横前 明さん】

そうですね。今、齋藤さんからお話があったように、やはり、今、年長さんが3人なんです。全体的には今、10何人ずつおってうれしいんです。それで未満児が、今日もその話をしておったんですけども、もう待機児童が出始めたということで15人、平面積からして、それ以上受けられないというような話で、今、お待ちをし始めたというようなことで、これはありがたい、本当にうれしい話です。

【長野県知事 阿部守一】

泰阜村も待機児童がいるとは…

【泰阜村長 横前 明さん】

そうなんです。早く保育園を建てかえなければいけないなと思っているんですけども。

人口が、1,650人不足なんですけれども、人材ですね。65歳以上が4割、そして15歳未満が約1割、残りの5割の皆さんが生産人口ということでございますので、その人材をいかに確保できるかということが問題だと思います。

【長野県知事 阿部守一】

ちょっと、泰阜村の未来は泰阜村の皆さんに考えていただきたいと思っているので、あまりさしでがましいことを言い過ぎてはいけなかなという気もしますけれども、昨日、大鹿村で観光関係の人たちとランチミーティングをしたんですよ。そのときに私が申し上げたのは、大鹿村というのは通過していく観光客がほとんどいないところなんで、私が県知事としての立場で県全体の観光振興を考えるときには、例えば今、長野県の旅館の客室稼働率は全国最低レベルなんで、私はとにかく人が多く来てもらうことを、今、目指さなければいけない立場ですけども、大鹿村の人たちは違うんじゃないですかと話をしたんですよ。

大鹿村、例えば宿泊のキャパシティがあるんで、例えば大鹿村の大鹿歌舞伎に1万人来ら

れたって困るわけですね。多分、適切な規模感、観光客がどれくらい来ればいいのかという、適度な、観光業も継続するし地域の文化とか自然環境も持続可能な、適度な観光振興のやり方というのがあるんじゃないですかねという話をしたんです。

多分、地域社会も私は同じだと思っているので、やたらめったら人口が右肩上がりに増えても、泰阜村で待機児童が出始めているというのはちょっと認識がなかったですけども、また違う課題が出てくると思います。かといって、どんどん人口が急激に減り過ぎても地域の支え合い、助け合いの基盤すらなくなってしまうので、そこはやっぱりある程度、理想像と現実のトレンドとの中間点に目指す姿が多分あるんだろうなというふうに思います。

そのときに人口の問題、これ全部関係する話なんで、一つはやっぱり定住人口を増やすためには、魅力ある地域社会をつくと同時に働く場所をどうするのという話が必要だと思いますし、そうすると、では出産環境はどうなっているのか、子どもたちが生まれたときに、保育園は大丈夫かとか、小学校の教育は泰阜村でもちゃんと受けられるのということをセットで発信をしていかないといけないんだろうというふうに思います。

昨日、喬木小学校へ行ってきたんですけども、あそこは遠隔教育というか、喬木村第1小学校と第2小学校と、私が見させてもらった第2小学校のクラスは8人ぐらいでしょうか、小規模校で、そこが第1小学校と画像でつないで、一緒に授業をやっているんですね。

何を言いたいのかと言ったら、だんだんその技術も、さっきのテレビゲームをやり過ぎで問題だという、その技術革新の負の側面もあるのでそこは抑えていく努力をしなければいけないと思いますけれども。技術革新のいいところはもっともっと、地域社会にこそ、どんどん積極的に取り入れたほうがいいんだろうというふうに思います。地域社会のほうが多分、都会よりも早く入れやすいだろうなというふうに思います。

ぜひ教育なんかもそういうICTとかをもっと使って、海外ともつながるし、知事さん今度、反対の企画をやるからと昨日言われたんですけども、それはインターネットで映像をつないで、私が映像で参加しようかなというふうに思っていますけれども。今、そうやってコミュニケーションができる時代になっているので、教育とかはそういうことも含めて考えていかれるといいんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと、あまり女性の話に今日なっていないような。女性の皆さんの活躍の話は共有できたと思いますけれども、何か女性の立場から何かもう少し、これが課題だというのはないですか。

【進行役 山崎鈴代さん】

いかがでしょう、小黑さんとか、齋藤さんとか、井野さんとか、何かもうこんなところはもう嫌だとか困ってしまったみたいのところとか。

【井野春香さん】

すみません、失礼して。私自身は、泰阜村だからなのかもしれないんですけども、女性だからこう、何か働くために難しかったとかというのを感じたことが全くなくて、地域との付き合いも1軒に私一人なんで出させてもらっているんですけども、常会とかも。普通に役も回していただきますし、何か特にこれといってあまり差を感じたことがないというのが正直なところですね。

【長野県知事 阿部守一】

それ、本当に正直？

【井野春香さん】

そうです。私自身があまりそんなに気にしないたちなのかもしれないんですが。

【長野県知事 阿部守一】

小黒さんは。

【小黒あかりさん】

私も全く同じ。

【長野県知事 阿部守一】

会場の人から、女性の立場で何か。では、女性にとっては理想的な村ということでもいいの。

【参加者】

すみません、ではちょっと。私も外から来ているので、まず初めに感じたのはとにかく、さっきから何回も出ていますけれども、すごく温かさがある。人と人をつながるという意味ではもう本当に一個人として、それが大人であろうと子どもであろうと、女性だろうと男性であろうと受け入れてもらえるというところがすごくいいなというふうに思っています。

ただ、やはり一つ、拳げるとすれば、そこまですごいということではないんですけども、やはり年代が上だとやはり、さっきどこかで話があったかと思うんですが、公式の場であったりそういったところは男性は外で、女性はやはり中を守るみたいのところはやはりまだまだ強いかなという感覚はありますね。

ただ一方で、今、さっき待機児童の話も出ていましたけれども、前はそこまで幼いうちにお子さんを保育園に預けて働き始めるお母さんは少なかったんですけども、最近どんどんに皆さん預けてどんどん仕事を始めてというお母さんたちが多いたとは思っているので、そういった

意味では、若い世代ではどんどん変わってきているのかなとは思っているので、少しずついろいろな場に女性陣がもっと出ていけるといいのかなというふうには思います。

【長野県知事 阿部守一】

なるほど、では女性が頑張ったほうがいいの、それとも、もうちょっと男性も変わったほうがいいの、あまり男性だとか女性だとか言わないほうがいいのかな。

【井野春香さん】

私を感じたことではないんですけども、よく話題として出るのは消防。やっぱり南信地域はよく頑張っているからなので、消防の地域はお母さんたちが大変だというのは耳にします。

消防の練習が結構、週に何回か夜にあって帰りも遅いので、お家におじいちゃん、おばあちゃんがいらっしゃる家庭とかは大丈夫なのかもしれないけれども、Iターンで来た方とか、Iターンでなくても、お母さんだけで家を守っている方は大変だということを・・・

【長野県知事 阿部守一】

なるほど。それは多分、地域で激論したほうがいい話ですね。

【井野春香さん】

なでしこの会でお母さんたちが集まれる会ができたというのは大きいかなと思うんですけども。

【長野県知事 阿部守一】

長野県は結構、最近は女性の消防団員も増えているんですよ。消防団員の平均年齢は日本で最も若いので、結構、消防団活動自体は元気な県のほうではあるんですよ。

ただおっしゃるように、拘束時間が長くて大変だという意見はあるので、そこはどうなんですか、皆さんで少し考えたほうがいいような気がするけれども。

社会のルールって、法律で決まっているルールから町内会のしきたりみたいなことまでいろいろなルールがあって、私は世の中がどんどん変わっているのでやっぱりどんどん、そのルールのあり方自体も変わっていかなければいけないことがいっぱいあると思うんですよ。

だけどそれって、あんまり平場で話す機会がないような気がするんですよ、私は。そういうのもっとみんなで、これって何か大変だけれども、どうしてこうやらなければいけないのとか、何でこういうルールになっているのというのをもっともっと地域で考えてもらったり、あるいは県全体の話は、私ももっともっと県全体で、県の職場でも、あるいは県議会

の先生方とも議論しなければいけないと思いますし、もっともっとそうやって変えていくことが、これから必要になっているんじゃないかなというふうに思います。

これさっき控え室でも、私、宣伝したんですが、喬木小学校で、『もっと賢くもっと夢がかなう時代になる一つの方法』なんて考えているわけですよ、小学生が。4年生ですよ。泰阜小学校も多分、何かいいことをやっていると思うので、ちょっと泰阜村の小学校、まだ視察させてもらっていないので、ちょっとまた今度、何か気づかせてもらえればいいなと思いますけれども。

私、この5つ、全部いいなと思っていて、『はてなはすぐ聞く』『気がついたらすぐ言う』『わかったふりをしない』『間違えたとわかったら素直に変える』『何度も質問する』こういったものは大人も必要だし、地域社会って本当はこれが必要なんじゃないですか、何でこういうルールになっているの。何で消防団はこれだけ訓練しなければいけないの、それやっぱり、今までこうだったということじゃなくて、ああなるほどと、それならみんなで頑張ろうねというふうにやっぱり納得性があるって、同じことをやるにしてもですよ。結果的には今までと同じかもしれないけれども、同じことをやるにしても、みんなが腑に落ちてなるほどと、それなら僕も頑張ろうと思うか、今までこうなっているから、君は新しく入ってきたんだから同じようにやりなさいと言われてやるのでは、多分、やる気は全然違うと思います。

それから、さっきからもいろいろお話が出ている中で、さっき小黒さんが言ってくれた泰阜村の通学合宿は子どもたちの『やりたい思い』をスタートにするという話があったじゃないですか。地域社会にとって、これはまさに『学びと自治』の観点ですけども、やっぱり一番重要なことはやりたい思いを形にしていくことが大事なんで、人から言われて、私なんか一番そういう性格なんですけれども、人からこれやれと言われるのが嫌なんですよ。嫌なの。

やっぱり何か問題があって、これってどうすれば解決できるのかなというのをやっぱりみんなと一緒に考えて実行していく。そのほうが同じやるにしても、今日、ごめんなさいね、山崎さんに感想をと言われておとなしく感想を言えればいいのかもしれないんですけども、感想を言わないで勝手な進行をできてしまっていて申しわけないんですけども、やっぱり、人から言われたことをやるんじゃないかって、自分たち自身が気づいて、問題意識を持って、そして行動するほうがやる気も出るし、本当にいい地域社会をつくるということにもつながってくると思います。

今日は5人の方々からそれぞれ取り組んでいることとか課題を出してもらって、多分、会場にいる人の中でもいろいろな気づきがあったんじゃないかというふうに思います。例えば松島さんと一緒に、もっと子どもの育ちを一緒に応援したり、読み聞かせとかも、私も一緒にやれるんじゃないかなと思った人は、すぐ、カンガルークラブに入ってくださいね。

それから木下さんの悩み、まずは共有しましたよね。泰阜村は、先ほどからお話があるように、地域社会でみんながつながっていて温かい、都会に比べればずっと豊かで温かい社会



だと私は思います。だけど、そういう地域社会の中でも、居ずらさを感じている人たちは本当にいないのかなというふうに思ってもらって、ちょっとだけ声をかけていただくだけでも、全然社会のあり方というのは変わってくると思います。

ぜひ、孤立する人が出ないように、長野県は、今、SDGs（エスディーゼーズ）と、新しい総合計画の中にも書いていますけれども、国連で持続可能な開発目標というのを定めて、世界で取り組みましょうというのをやっている目標がいっぱいあります。その一番基本的な概念は、『誰一人取り残さない』です。どんな人でもみんなと一緒に暮らせる社会をぜひつくっていきたいと思います。

今日、参加いただいた皆様方には、私からあらためて感謝を申し上げるとともに、ぜひ、泰阜村をよくしていくのは、私でもないというと怒られてしまうかもしれないけれども、私も頑張りますよ。村長も頑張ると思います。でも、私とか村長だけではできないことがいっぱいあるので、ぜひ今日集まっていた皆さんの力で、もっともっと泰阜村が安心できる元気な村になるように取り組んでいただければありがたいなと。という反面、県知事はこんなことをやれとか、お前、こういうことが配慮が足りないんじゃないかと、そういうご批判はどんどんいただければありがたいと思いますのでよろしく願いいたします。

【進行役 山崎鈴代さん】

ありがとうございました。知事、進行もありがとうございました。

それでは司会の方にマイクをお返しいたします。

【南信州地域振興局 企画振興課 課長補佐 飯田史晴】

山崎さん、どうもありがとうございました。

限られた時間でしたので、ご発言いただけなかった方もいらっしゃると思います。封筒の中にアンケートが入っておりますのでご記入いただき、入口のあちらのほうにアンケートの回収ボックスを置いております。そちらにお入れいただければと思っております。

それでは最後に知事から、本日のタウンミーティングの締めくくりとしてコメントをお願いしたいと思います。

#### 4 知事総括コメント

【長野県知事 阿部守一】

もう申しわけないほど言っちゃったので、私からはあらためて御礼であります。

横前村長、それから松島前村長をはじめとして、本当に泰阜村の皆さんにはこれまで8年

間も大変、お世話になってきております。

私は、今回移動知事室で南信州地域、いろいろな町や村を回らせていただいていますけれども、本当にお金で換算できない豊かさがある地域だというふうに思っています。ですから、昨日も伊那谷自治体会議で、リニア新幹線時代にどう向きあっていくかということ話をさせてもらいましたけれども、私はぜひ、皆さんの中で本当にこの地域が守っていくものと、それからもっと変えていくべきもの、それをぜひ一緒になって考えていただいて、我々行政も守るべきもの、昨日も出ていましたが、例えば景観を守るときに、もちろん皆さんの力で守れることもあると思いますけれども、これはもっと行政がしっかりルール化して守れというものは我々も考えます。

それからもっと変えるべきもの、世の中はどんどん技術も進むし、社会のあり方、そして今、世界と常につながっている状況になっているので、どんどん変わらなければいけないこともたくさんあります。昨日もリニア時代を迎えるに当たっては、例えば自動運転、リニアができる頃には自動運転は実用化のフェーズ（段階）に入ってくるだろうというふうに言われていますので、今まで、年をとって運転は不安だけれども免許を持って自動車を自分で運転しないと暮らしができないなということも、10年、20年経つと、免許証がなくても中山間地域にいても暮らせるような時代になってくると思うんです。そうしたときにどういう社会でありたいのかということを考えて、変えていくべきものは変えていく、そういうことが必要な時代になってきていると思います。ぜひ、冒頭申し上げたように、『学びと自治の力』で長野県を発展させていきたいと思っておりますので、どうか皆さんにもこの考え方を共有していただいて、一緒になって取り組んでいただければありがたいと思います。

本日は、ちょっと会場の皆さんにもうちちょっと意見を言っていただければと思いましたがけれども、時間がなくなってしまったので、申し訳ございませんけれども、これで閉じさせていただきます。

お忙しい中、大勢の皆様方にお集まりをいただきまして本当にありがとうございました。どうぞこれからもよろしくお願いいたします。

## 5 閉会

【南信州地域振興局 企画振興課 課長補佐 飯田史晴】

ご参加の皆様、長時間にわたりどうもありがとうございました。パネラーの皆様、どうもありがとうございました。

それでは、これもちまして県政タウンミーティングを終了いたします。

(以上)